

くまもとアートポリスアジア国際学生設計コンペティション
最終審査結果及び講評

くまもとアートポリスの取組みを国内だけでなくアジア諸国に向けて広く情報発信するとともに、県内の学生とアジア諸国の学生の交流を深めることを目的として開催された『くまもとアートポリス 2014 アジア国際シンポジウム』の中心企画でありました国際学生設計コンペティションは、エネルギー溢れた作品応募と真剣な公開審査によって充実した成果をあげることができました。審査会場に参加していただいた方々を含め、企画主旨に賛同し御協力していただいた皆様に改めて深く感謝いたします。最優秀案が決定いたしましたので報告をさせていただきます。

■海外部門最優秀賞

作品名：「IN-BETWEEN HOUSE/あいだのいえ」

チーム名：ONSAEMIRO/延世大学校（韓国）

メンバー：TAEKMIN KIM、DEOKHWA JEON、HYUNGCHUL LEE、JIEUN KIM、JUWAN KIM
（指導教官 MOONGYU CHOI）

■国内部門最優秀賞

作品名：「丘に集う」

チーム名：九州大学D

メンバー：井田 久遠、Villais Lucie、土井 彰人、前田 清貴、古里 さなえ

海外部門は、インドネシアのガジャマダ大学案「"Growing House"成長する家」と韓国の延世大学校案「IN-BETWEEN HOUSE/あいだのいえ」が優秀案として最後まで競いました。延世大学校案の良さは比較的単純なプランに整然と機能がおさまっており、周辺との関係におけるヴォリューム設定(形状)に説得力があります。病院の他の施設群との関係を考えると、この位のシンプルで表現過多に陥らない案がふさわしいと判断しました。

ガジャマダ大学案は、大変ユニークな提案で学生らしいパワーが満ちており好感が持たれます。敷地周辺が自然の風景であれば映えるかたちですが、既存周辺施設との関係性を構築する場合の懸念が拭いきれません。

海外部門の審査委員特別賞3案の同済大学案、国立交通大学案、チューラーロンコーン大学案も個性的な提案が魅力的でした。5案に総じていえることは、敷地のある阿蘇地域は冬季寒冷地であることに対する配慮が必要であるように思いましたが、それぞれの国の気候風土が異なることを考えるとそれをイメージすることは容易ではなかったのかもしれない。

国内部門では九州大学D案「丘に集う」に最も荒削りな力を感じ、最優秀案に選考しました。水害対策も考慮しての丘の提案とルーズな関係性の存在は妙な説得力があります。「みんなの家」としての役割を果たすには主要機能のスタディが必要と思われませんが、“大らかで楽しそう”という点では阿蘇の風土にふさわしい案です。これからの飛躍に期待したいと思います。

他方の優秀案であった佐賀大学案「Take Place-生起する場所、中間領域の提案」は、一

見都会的な計画のようにみえますが、建築に中間領域を創出することで内外部の活動や周辺施設との連携を考え、60 mmの杉角材モジュールを採用した木質空間の提案と合わせて地域に根ざすための試みが評価されます。しかし、軒のない木造建築の耐久性や配置構成についての課題も多いように感じられました。

審査員特別賞の中では佐賀大学案「足湯でつながる『みんなの家』」がヴォリュームは少し大きすぎるようですが、単純明快で開放的な足湯の魅力が伝わってくる好感のもてる提案として印象に残ります。熊本大学案「3つの屋根のみんなの家」、九州大学E案「かぎかつこの家」の両案は現実味のある計画でしたが、少しまとまりすぎていたようです。

海外部門5作品と国内部門28作品、合わせて33作品の持つエネルギーは、予想をはるかに上回るもので、それは公開審査の発表や持参いただいた模型の迫力によって直に感じることができました。国を超えた大きな視座、アジア圏の共通認識も垣間見えたことが本コンペのかけがえのない収穫でした。

課題となった阿蘇温泉病院の「阿蘇に建つ「みんなの家」を付設するリハビリテーション施設」は、今後実現の方向に向けて動きだすこととなっています。コンペが学生対象であったために建築法規的なこと、設備、運営や予算計画についてシビアなことは敢えて不問にしていたわけですが、実施になるとかなり厳しい現実が待ち受けていることはいうまでもありません。最優秀案に選ばれた2つのチームは、実現に向けた基本設計レベルにおいて何らかのかたちで参加していただくことになろうかと思えます。

アートポリスもかかわっている東北での「みんなの家」は住民や施工者、学生達がひとつになって、皆の対話の中から「心あたたまる場」がつくられました。その精神を忘れず、建築家のみに通ずる建築家的コンセプトで考える時代は終わったことを特に次代を担う方々が強く認識してくださることに期待をしています。

最後になりましたが、課題となりました施設計画の企画に深い御理解をいただいた阿蘇温泉病院（医療法人社団坂梨会）に感謝の意を表します。

くまもとアートポリス・コミッショナー 伊東 豊雄
アドバイザー 桂 英昭
末廣 香織
曾我部 昌史